京都大学医療技術短期大学部紀要別冊
健康人間学　第4号　1992

「ふれあう」生き方
―― 地域で共に生きる ――

山　根　　寛

The Interdependence in Community Life

Hiroshi YAMANE

ABSTRACT: Before World War II, many people with mental disorders lived together with us in the same community. At school, handicapped children learned alongside us in the same classroom. However, in the postwar period of Japan's economic growth, people with mental disorders and handicapped children, have come to be sorted out and segregated. This was in order to treat or educate them equally, but in the process they are segregated, and our human relations deteriorate as well. The indifference arising from segregation increases the prejudice against people with mental disorders and handicapped children. This ignorance, which arises from inexperience in being with people with mental disorders or handicapped children, leads to more serious discrimination and prejudice. The fear that we will face our own intrapsychic stigma is related to our identification and segregation of people with mental disorders and handicapped children from our community. We are currently attemping a transition from hospital rehabilitation to community-based care. Therefore, we must begin by considering the meaning of our segregation, and living together harmoniously as members of the community.

Key words: Community, Human Relations, Normalization

I　序

戦後から昭和30年代にかけて，明日食べるものにも事欠く日から，脱脂粉乳のミルク給食を経て東京オリンピックへと，日本は大きく経済成長の道を歩んだ。決して良い時代であったとはいいがたいが，かつての町の中には，ただのノスタルジーとは違う人と人とがふれあって生きる何かがあったように思う。

今，町の中には「物」があふれるほどあるが，何かしらありあまる「物」に空々しさを感じる。生産性の拡大による物の豊かさと引き換えに，

京都大学医療技術短期大学部作業療法学科
Division of Occupational Therapy, College of Medical Technology, Kyoto University
1992年3月5日受付

ゆとりをいけにえにしたと暉峻[1]が指摘するように，何か追い立てられているような，ゆとりのなさを感じる。そして「物」が豊かになり，町が変わっていく中で，確実に町の中から「選り分け」られ隠されたものがある。

この生産性の拡大を自己目的化した結果ともいえる「物」の氾濫と町の中から「選り分け」隠されたものとは深く絡み合いながら，人と人との関わりを分離（segregation）し変質させた。大平[2]はこの社会の病状の一面を「モノ化した人づき合い」とよび，人や自分を物のように扱うことで生身のふれあいによる葛藤を避けようとしていると分析した。

医療の中におけるリハビリテーションから，地域で支え共に生きるコミュニティ・ケアへ向かおうとしている今，「選り分け」隠されたものについて考え，「ふれあう」こと共に生きることの意味を問いなおしてみたい。

Ⅱ　かつて町の中で

開かれた精神医療をめざす石川[3]は，「かつて町に住んでいた彼ら」と，戦前は多くの精神障害者が町で共に暮らしていたことにふれ，わが国の精神医療の矛盾を語っている。これは石川個人の体験であると同時に，同時代を過ごした者誰もが持っている共通の体験でもある。戦後まもなくから昭和30年代にかけて，山陰の小さな町で幼少年時代を過ごした筆者も石川と同様の体験を持っている。その日本海沿いの町には周辺の町や村々をあわせて，小さな精神病院と小さな老人ホームが一つずつあった。しかし今の施設の入所事情とは多少異なり，入っているのはほとんどが身寄りのない人々であり，障害を持つ多くの人は町で共に住んでいた。

「ひろっさん」も私と同じ町に，彼の両親や彼と同じ病と思われる姉妹と共に住んでいた。今にしてみれば，比較的軽度の精神発達遅滞に加え精神分裂病を発病した接枝分裂病と思われる。当時も十分その病が理解されていたわけではないため，差別が含まれていなかったわけではないが，「ひろっさん」を学校帰りに見かけると，子供達皆ではやしたてて，「ううっ」と手を振りあげるのを見て逃げ出して遊んだものだ。

姿を見かけないときやはやしたてても反応のないときは皆で心配し，時には給食のパンの残りを分けて食べたりもした。「ひろっさん」はたいていは町の中をぶらぶらしていたが，時々は頼まれて草ぬきや荷物運びをし，何がしかの小遣い銭や食べ物をもらっていた。同じとは決して思わなかったが，町の中で一緒に住んでいることに対して，特別なこととともおかしいこととも思わなかった。お互いの違いの中でふれあいながら棲み分ける距離ができていたように思う。

そして学校では，生徒が何人に増えようと，皆均等にクラス分けされ，特別な学級はなかった。「ノブ」はいつも学校にヘビの子やこうもり，栗，柿などを持ってきては机の中にいれていた。良くても一桁の点数のテストを，竹の棒の先に刺して遊んでいた。皆一緒に遊んでいた。

夏の暑い日，おやつ代わりに曲がったひねくれキュウリに塩をつけて食べたり，もぎ取るとむせるほど匂いのする真っ赤に熟れたトマトを，汁がシャツに滴るのもかまわず，「ひろっさん」や「ノブ」とかぶりついたものだ。それらはどうにかならないものを無理に何とかしようとせず，あるがままを共に受け入れる実存的なあり方であるともいえる。未分化な要素もあり，違いによる多少の差別を内に含んでいるとしても排除することはなかった。

Ⅲ　今，町の中で

「物」があふれる中で感じるゆとりのなさ，空々しさ，この国の何かが変わったのだろうか。私たちのどこかが変わったのだろうか。「物」は豊かになり，八百屋に行くとキュウリやトマトは同じ大きさ形にそろえられ，一年中買うことができるようになった。しかし「ひろっさん」や「ノブ」とかぶりついたキュウリやトマトとは，色も匂いも味も違う。

日本中どの町や村に行っても，町や村の中に

「ひろっさん」達の姿を見なくなった。1964年，東京オリンピックの年ライシャワー刺傷事件があり，それをきっかけに2年後精神衛生法が改正され，日本中の「ひろっさん」達は，町から隠され始めた。良心的に治療を目的とした病院がなかったとは言わないが，大半は治療より社会治安が優先した隔離収容であった。今，都会の吹き溜まりに，似たような病かも知れないと思われる人を見かけることもある。しかし，「ひろっさん」のように町の中で私たちと共には生きてはいない。

学校の中に入ってみても，どの学級にも居た「ノブ」がいなくなっている。1973年に，1979年より養護学校の義務制を実施すると公布され，「ノブ」達は普通学級から養護学校へ移って行った。それは教育の機会均等の実現を図ったものであるが，同時に教育の分離（segregation）につながっていった。教育の分離は生活の分離でもあり，共にふれあう場を失うことであった。教育の機会均等からできた養護学校も，今では分離することの問題が問われ始めている[4]。

それらはみな日本が高度経済成長期に入り，「効率の良い規格品」づくりへと，「物」の豊かさを求めた協奏曲が高らかに鳴り始めた時代の流れと歩みを共にしている。精神病院入院患者数の変化（図1），養護学校在学者数の変化（図2）の図は，「ひろっさん」や「ノブ」達と私たちが共にふれあう場から分離されていった様子を示している。そしてこれらの変化が，わが国のGNPの変化（図3）とほぼパラレルな関係にあることが，生産性の拡大と「選り分け」の思想の相関を示している。

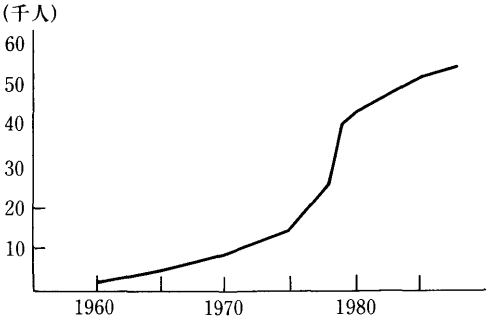

図2　養護学校在学者数の変化

効率が求められるとき，常に同じ質と量が求められる。野菜は，色や形が均一で，一年中手にはいることが求められ，種から操作され選り分けられ，不都合な物は排除されていった。規格外のもの見たくないものが選り分けられ，生活で直接「ふれあう」場から排除されていった。「ひろっさん」達が精神病院に入れられ，「ノブ」達が特殊学級，養護学校，施設へ入れられた背景に，同じ様な「選り分け」の思想がなかったと言いきれるだろうか。

福祉が叫ばれ，わが国においても身体の障害に対しては，少しは支えあう生き方が見直されるようになってはきたものの，ノーマライゼーションの原則とはあまりにもかけ離れている。ましてや心の障害を持つ「ひろっさん」達には未だ陽があたらない。精神病院をなくして退院者に住居を提供したイタリアのトリエステの

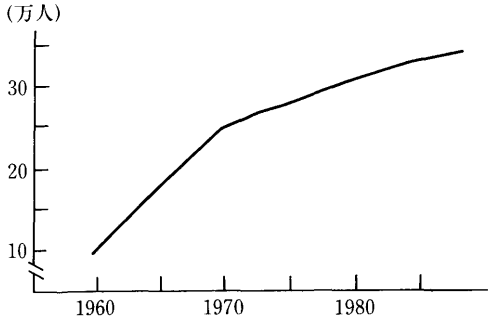

図1　精神科入院患者数の変化

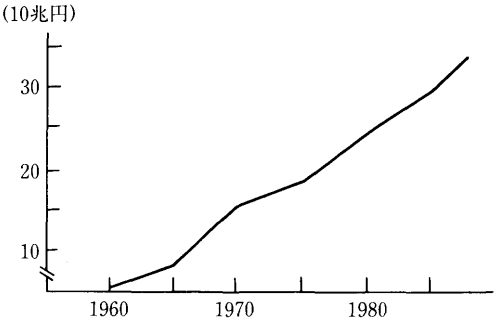

図3　わが国のGNPの変化

例[5,6]に見られるように，欧米の精神医療が共に町で住む試みを模索している中，わが国の精神科の病床数は増加し続けてきた。そして急激な高齢化にともない，痴呆老人と呼ばれる人達が精神病院や老人施設へと町や家族から分離され，「ひろっさん」達と同じ立場に今またおかれようとしている。彼らは，若かりし時にはこの国を支え，年老いて若かりし時の機能を少し失った人達である。

Ⅳ　「選り分け」ること

命あるものが限られた場で共に生きるとき，ヒトを除いた生物の世界においては「共生（symbiosis）」や「棲み分け（habitat segregation）」ように，皆少しずつ違う（言葉を変えればほとんど同じ）ものが，共に生き，ふれあいながら棲み分けることで，バランスが保たれている（図4の左）。しかしヒトの世界では，効率を求める人為の手で，どこか違うものは「選り分け」分離される可能性が常にある（図4の右）。スイスの動物心理学者ヘディガーが，個が集団の一員として行動しうるかぎり取りうる最大のへだたりを社会的距離（social distance）とよんだが，ヒトの世の中の「選り分け」はこの社会的距離すら物理的にも心理的にも遮断してしまうものである。

「ひろっさん」や「ノブ」が私たちと共に生きる場から姿を消し，生活の場でふれあうことがなくなったことで，次第に私たちはその存在に無関心になっていった。一度は同じ場で生活をしていた私たちでさえそうであるのに，ましてや生まれたときから「ひろっさん」や「ノブ」と出会うことがほとんどなかった私たちの世代より後の世代は，自らが選り分けることの葛藤すら体験していない。したがって彼らにとっては「ひろっさん」や「ノブ」は無関心という対象にすらなっていない。このように，ふれあわなくなることによる無関心は差別や偏見を増大させ，さらに出会わない知らないことによる無知は，違和感からの困惑と排除など，より深い差別と偏見を生む。

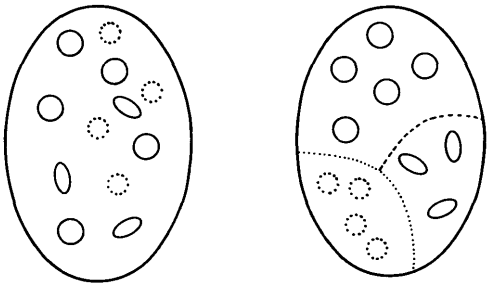

図4　社会の中の「棲み分け」と「選り分け」

この社会の中の少し違うもの異質なものを「選り分け」る構造は，私たち個人の中で認めたくない受け入れたくない自分の中の影を，自我から抑圧（排除）し無意識の世界に封じ込めようとする（図5左から右へ）ことと合い通じる。私たち自身の中にある見たくない触れたくない気持ちが，社会の中に選り分け分離する構造として表れ，また社会の中の分離の構造は，私たち個人の中の影との出会いを妨げ歪ませる。松本が忌避，排除の対象について「日常の共同体社会では抑圧されたものがその社会の一部の人たちに投影されるという機制となって作動する」[7]と言ったように，社会の中で少し違いを持っていた「ひろっさん」や「ノブ」は，私たち個人の中の「ひろっさん」や「ノブ」でもある。

未分化な状態から分化する過程で「選り分け」という現象がみられたとしても，それに引き続いて「分離 segregation」に向かうのか「統合

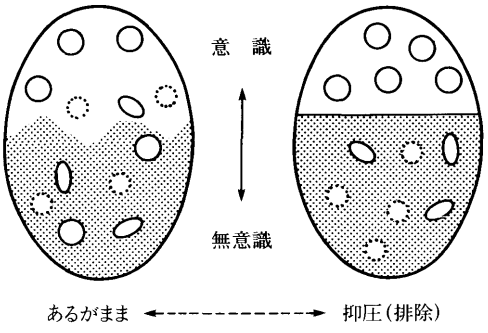

図5　個人の中の「あるがまま」と「抑圧（排除）」

integration」に向かうのかではまったく逆の道を歩むことになる。「ふれあう」あり方がその道を分ける。

V　「ふれあう」こと

「ふれあう」ということは，触れると同時に触れられている，どちらが主とは言えない相互主体の関係である。そしてお互いの距離のわからない間は，その言葉の響きの優しさとは異なり，知らずに相手の生活や心の中にまで踏み込んでしまう侵襲性を含んでいる。ヒト以外の生物ではその侵襲性がお互いを滅ぼさない距離が保たれる自然の摂理がある。それが「共生」や「棲み分け」にみられる距離である。しかし，ヒトの場合は大いなる成熟の可能性と引換に，お互いを守る距離を身をもって知り自らを制御しなければ，そのお互いを守る距離を越え止めどなく相手の世界に踏み込んでしまう危険性をもっている。

また触れ合えば必ずお互いの違いが明らかになり，その違いを認めるかどうか受け入れるかどうかをめぐって様々な葛藤が起きる。そして葛藤を避けるため違いに触れないでいる未分化な状態は，わずかなきっかけで偏見や排除・攻撃を引き起こす可能性を常に秘めている。様々な違いを持つ者同士が，お互いを分離せず，排除せず，関わりを持ちながらよけいな干渉をしないですむようになるためには，私たちはまずお互いの違いに気づき認めなければならない。未分化な状態から違いを認め分化し，再びその違いを受け入れる統合の過程を経て，初めて歯止めを自らの意志でしなければならないヒトとしての「共生」や「棲み分け」の関係にたどりつくことができる。

そしてそのような日々の生活において，共に棲むための実存的状況ともいえるお互いの受け入れは，「外界についての我々のすべての知識にとって，その究極的な装置は我々の身体である」[8] とポランニーが言うように，肌でふれ五感で感じ身体が受け入れることにより成り立つといっても良い。演劇の世界でも，相手を知る，相手に伝える練習として，直接手で相手に触れる触れあうことを基本としているものもある[9]。近代科学の欠点と対比し臨床の知をという考え方を提唱する中村も，体性感覚が統合のベースになっていると身体を通して把握することの重要性を繰り返し述べている[10,11]。これらは全て，概念として違いを認め受け入れることも必要であるが，肌でふれ身体を通して知り得たものが統合されることで，初めて具体的な共通の理念となりうることをそれぞれの視点で示しているものである。

「ふれあう」とはそうした相互の関係性といえる。

Ⅵ　共に生きる試み

「ひろっさん」や「ノブ」が私たちと共に生きる場から姿を消し，私たちは「ふれあう」ことを忘れた。また「ふれあう」ことを知らないで育った世代を含む町の中には，自らの制御ができずにお互いを守る距離を越えた事件が幾つも起きている。

その一つ1991年11月，大阪の豊中市の中学で一人の障害を持った女生徒が集団暴力を受けて死亡した事件がある。1991年11月23日の朝日新聞は，その女生徒は障害を持つ児童と健常児の「交流教育」の取り組みとして，その春養護学級から普通学級に迎えられた生徒であった。そして集団で暴力を働いた4人の子供達はごく普通の家庭に育った遊び仲間であると伝えている。

また1991年12月1日の読売新聞は，東京都の「全国いじめ防止協議会」が，校内暴力を繰り返していた仙台市の中学生グループに，いじめをやめさせようと脅迫ともとれる手紙を送ったり，電話をかけたりしていたこと，12月19日の朝日新聞は，兵庫県西宮市の小学校で，いじめの加害者である男児の母親を授業へ立ち会わせたことを伝えている。

報道からは知りえないいろいろな事情が含まれていることであろうが，これらは日々の生活の場を通した「ひろっさん」や「ノブ」との触れあいの努力を忘れた私たちが，自分の心の中

の「ひろっさん」や「ノブ」との触れあいの恐れや戸惑いを身近な対象に投影した，新たな差別・偏見・排除・攻撃という未熟な衝動的行動といえよう。

一方精神の病に対しては，壁の向こう鍵の向こうに隔離・排除した方法から，デイケア，共同住居，共同作業所，アパート退院[12]など，地域で生活するいろいろな試みがなされている。それらは大きな努力の結果ではあるが，やっと病者同士が町の中にまぎれて，ある意味ではひっそりと病者同士が共に棲んでいるのであり，未分化な状況を含んでいる。まだ町の人と病者とは，受け入れる者受け入れられる者という関係にあり，決して主体的に触れあいお互いに受け入れるまでには至っていない。

一度は町の中から私たちの心の中から，未分化なまま分離した私たち自身の「ひろっさん」や「ノブ」と，もう一度「ふれあう」生き方を見つけなければならない。「ひろっさん」や「ノブ」と共に過ごした時代に比べ，家族単位や生活様式などに大きな変化はあるが，日々の生活世界で共に生きることを考えるときには，物作りの中で「選り分け」ながら走り続けた生活の速度を少し緩やかにし，肌を通してお互いが伝わる「ふれあう」距離で，ものごとをとらえていかなければならない。そのためにも，自分の家族に始まり，隣近所，友人，そして自分の住んでいる町の範囲で，まずふれあって生きることを考えていくことが大切である。

そうして，私たちはこの国の，この文化の，この町の風土の中で，共に生活していく努力をもう一度始めなければならない。それはこの国が豊かな文化を持つ国として成熟するために，避けては通れない第一歩である。また，私たち自身が成熟自立するためにも避けてはならないことでもある。

本稿の一部は第4回健康科学公開講座と京都大学医療技術短期大学部健康人間学研究会で発表した。機会をあたえていただいた第4回健康科学公開講座委員長藤原哲司教授，健康人間学研究会コーディネーター石井誠士助教授に感謝します。

文　　献

1) 暉峻淑子：豊かさとは何か．岩波新書．東京：岩波書店，1989: 1-246
2) 大平　健：豊かさの精神病理．岩波新書．東京：岩波書店，1990: 1-248
3) 石川信義：心病める人達．岩波新書．東京：岩波書店，1990: 1-248
4) 藤田弘子：養護学校とは何か．養護学校の行方（藤田弘子，堀　智晴，松島恭子，要田洋江共著）．京都：ミネルヴァ書房，1990: 1-60
5) 半田文穂：イタリアの精神医療事情．精神医療，1984; 13: 86-91
6) 半田文穂，豊田雅子：イタリア精神衛生法とその後の展開．精神医療，1986; 15: 55-65
7) 松本雅彦：「支えること」の意味――精神科医の立場から―．京都大学医療技術短期大学部紀要別冊，健康人間学，1990; 2: 38-44
8) ポランニーM：暗黙知の次元（言語から非言語へ）（佐藤敬三訳）．東京：紀伊國屋書店，1980: 1-146
9) 竹内敏晴：「からだ」と「ことば」のレッスン．講談社現代新書．東京：講談社，1990: 1-216
10) 中村雄二郎：共通感覚論．岩波現代選書．東京：岩波書店，1979: 1-349
11) 中村雄二郎：臨床の知とは何か．岩波新書．東京：岩波書店，1992: 1-223
12) 仲野　実：精神病院における実践―共同住居から地域で「共に棲む」構造へ―．社会精神医学，1982; 5 (2): 101-107